

起源の中の起源

——真のヴェルヌを求めて

ウィリアム・ブッチャー William Butcher 翻訳 石橋正孝

本日は、『地球の中心への旅』の成立過程についてお話ししたいと思います。とはいえ、それに先立って、一九九二年以来の私の研究の大まかな方向性をご紹介しておきましょう。それは最も人気のあるヴェルヌ作品の草稿を探索することです。その成果のひとつはまだ発表されておりませんが、多くの議論を呼ぶでしょうし、偶像破壊的であり、革命的であると言えらると思います。数千万部も売れた、誰もが知っていると思われているこれらの作品は、ある程度まで真作ではなかったと主張することになるからです。それらはヴェルヌ本人が書いたものではなく、彼が書きたいと思ったものでもなかった。編集者ジュール・エッツェルがその一部を書いていたのです。要するに、へ驚異の旅を研究するには、その元となった草稿ヴァージョンを知る事が不可欠であって、後者はしばしば刊行ヴァージョンより優れているのです。事実として、書き直しは根本的なものであることが多く、小説の構造と意味を変えてしまっています。別の言い方をすれば、私の研究の結論は、ヴェルヌ研究をその土台から覆すことになり、専門家の間ですら草稿が知られていない点こそ、これまで用いられてき

資料が豊富に残されているのです。

とりわけ一八七〇年代には、エッツェルは、ヴェルヌ名義の小説を何頁も、それどころか何章も書いています。彼は六回ないし七回小説を書き直すことすらありました。歳を取るにつれて彼の記憶力は減退し、何度となく、しかも時には矛盾したことを要求しました。一度退けられた要求を通すために、意識的に繰り返すこともありました。エッツェルは、手紙や草稿の余白に攻撃的なコメントを殴り書きしています。彼の書き直しには、彼が一人で、あるいはヴェルヌと共同で書いた部分に関するものが一定の割合で含まれています。自らの努力、とりわけ、甘ったるい、メロドラマ的な、センチメンタルな、けばけばしい、非論理的な、物語の流れを無視した加筆を彼は天に向かって自画自賛しています。この傾向を考慮する時、私はベイズの定理を反転させ、明らかにエッツェルが関わっているという証拠がない場合であっても、彼がある一節やテーマに示す関心は、それに先立って彼が行った介入に比例していると主張したくなります。

もうひとつのテーゼは、これまた実証は難しいのですが、ほかの小説の草稿に部分的に依拠した上で言えることとして、ヴェルヌの文章の中で違和感を覚えさせたり、やや異例だったり、さらには困惑させられたりする箇所は、編集者に責を負わせるべきケースが多いということです。無邪気な読者の主観的な反応——結局のところ、それが文学の存在意義でしょう——は、実際、草稿の解説によってしばしば裏づけられるのです。ヴェルヌの自然

な方法論の大半のアクレス腱となっていることを示すでしょう。エッツェルによるへ驚異の旅への介入は基本的に不当なものであって、作品生成の起源に近づけば近づくほど、小説の質は高まっていく傾向があることを私は発見しました。時として発見は劇的な様相を呈しており、と言いますのも、ヴェルヌの最も美しい文章が一世紀半にわたって未刊のまま埋もれていたからです。

逆説的な例外、規則を裏つける例外が『地球の中心への旅』です。この小説に対するエッツェルの貢献が例外的にポジティブなものであったからこそ、ヴェルヌはその後、編集者が押しつける変更、削除、加筆を辛抱強く受け入れることになったのかもしれない。それらは時と共に鬱陶しさを増し、不適切になっていったのです。

私の今日のお話の結論は、当然ながら刊行ヴァージョンと照合した草稿ヴァージョンから引き出されたものですが、やや思弁的な性格を帯びざるをえません。絶対的な証拠が欠如しているため、ほかの小説に対するエッツェルの介入を当てはめて考える部分が生じます。『地球の中心への旅』とは対照的に、それ以外の場合は

な文体と齟齬を来しているこうした箇所は、編集者が草稿を読んだ後、その余白に書きつけられていたり、ゲラで加筆されているため、草稿にはなかったりする場合ばかりです。

『地球の中心への旅』

一八六四年一月に刊行された『地球の中心への旅』の成立過程を理解するために必要な資料はほとんど現存しません。『気球に乗って五週間』(一八六三年)を対象とする最初の出版契約の後、エッツェルとヴェルヌは、一八六四年一月一日付で第二の契約を結んでいます。『地球の中心への旅』は言及されていません。地下小説の著作権は、一八六五年一月一日の日付を持つ、おそらくはそれまでの契約よりも不当な、そして間違いなく不明朗さを増した契約の付帯事項の中で、後付的に規定されています。『以上の条件』第一条から第六条までは、これまでに刊行された作品『気球に乗って五週間』『地球の中心への旅』『地球から月へ』『ハテラス船長の航海と冒険』にも適用され、エッツェル氏はそれらの「絶対的な」著作権を、それ以前に支払われた金額に加え、五五〇〇フランを追加的に支払うことにより、ヴェルヌ氏から獲得した。

この小説に言及している同時代の資料は、一八六四年八月一二日付ヴェルヌ書簡だけです。草稿の手直しが終わった後、初校が出る前の時点で書かれたと思われるこの書簡の性急な口調は、少なくとも数ヶ月前から始まっていた書き手の隷属的な姿勢を示し

ています。『地球の中心への旅』が正確にいつ印刷されるのか、教えてください。』もともと、一八六三年一月二日付の書簡でも、長く待たされていることが仄めかされていて、その原因となったのは、『イギリスとスコットランドへの旅』、『二十世紀のバリ』、『ハテラス』第一巻、そして／＼あるいは『地球の中心への旅』かもしれない。

小説それ自体——その後に書かれた小説は、多くの場合、刊行見込み時期と作中時期を一致させています——は、一八六三年五月に始まり、同年九月〔XLIH 19〕に終わる出来事を物語っています。このことから、執筆は一八六三年中旬ではないかと思われる。この仮説が正しければ、エピソードがそのさらに「六ヶ月」〔XLIH 193〕後のこととされているのは、物語の終わる時期と刊行の時期を近づけるための事後的な加筆でしょう。小説全体の時期を変更することは不可能だったはず。ドイツ人登場人物たちはデンマークを横切ってその植民地のひとつに向かうことになっているにもかかわらず、一八六四年二月一日にプロイセンがデンマークを侵略したからです。おまけに、「J・ヴェルヌ対ボンII ジェスト裁判のための覚書」(一八七六年二月から三月)の中で、ヴェルヌは、小説の刊行時期を一八六三年としているのみならず、その頃は「エッツェル氏と親しくしておらず、あまり頻繁に会っていなかった」と書いています——この間違いと否認からして、執筆時期がそれより前とは考えにくくなります。

したがって、小説の第一稿は一八六四年以前にでき上がっていた自身の北方への旅の時期とも一致しています。この旅行こそ、ヴェルヌが書いた北への旅行物語すべての起源となった決定的な体験なのです。

注目すべきシンメトリーとして、『ハテラス』には日付に関する逆方向の間違いが二つ存在していて、作中の時期を一八六三年としています。一八六一年と一八六三年の間のこの行き違い、似た文体と内容といったすべてが、この二つの作品を互いに結びつけているように思われるのです。『地球の中心への旅』は、『ハテラス』の締めくくりだったとは考えられないでしょうか。事実、『ハテラス』は、執筆がかなり進んだ段階で二万語に及ぶ削除が行われているのですが、草稿にはそのうちの三〇〇〇語しかないのです。もしこの削除部分が『地球の中心』であれば、円環は完全に閉ざされることとなります。『ハテラス』では、アングロロイサクソンの国への帰還には幾多の障害が付きまといましたが、それが地下世界経由になるからです。こう考えれば、エッツェルとヴェルヌの第二の契約が、その対象である作品がゲラになってから三ヶ月も後に結ばれている事実も説明しやすくなります。当初は三万五〇〇〇語しかなかった地下小説のささやかな分量も、元々は北極遠征のエピソードにすぎなかったとすれば、理解できるでしょう。もともと、この仮説を支持する資料はなにひとつなく、現段階では推測の域を出ません。

以上に加え、ヴェルヌが初めて完成させた小説の一つである『二十世紀のバリ』と『地球の中心への旅』の間にも繋がりがあ

たと考えられます。とはいえ、一八六二年の年末にゲラが出たものの刊行を見送られた『イギリスとスコットランドへの旅』、そして一八六三年初めに刊行された『気球に乗って五週間』よりも『地球の中心への旅』のほうが優れていることを考え合わせれば、それが二作の後に書かれたことを窺わせます。つまり、執筆時期として従来広く受け入れられていた定説である一八六四年を完全には排除すべきではないでしょう。

『地球の中心への旅』は、『ハテラス』と関連性が高く、両者が元々は同一作品だった可能性を斥けることはできません。二作は特殊なテーマを共有しています。「両極には巨大な開口部があって、そこからオーロラの光が発散され、地球の内部に入り込むことができる」(『ハテラス』第二部二四章)という仮説がそれです。換言すれば、『ハテラス』が終わっている点、すなわち、極北の入口という観念が『地球の中心への旅』の出発点になっているのです。

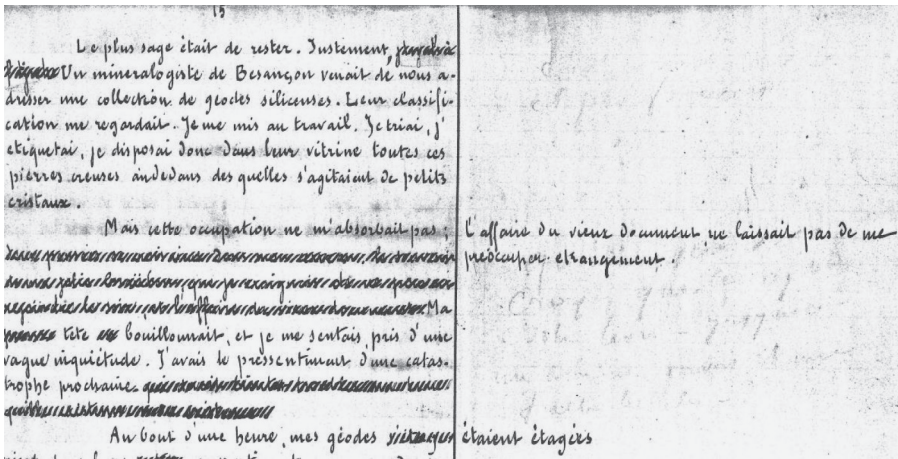
『地球の中心への旅』と同様に、『ハテラス』——『地球の中心』と同時に刊行され、その支払いは一八六四年二月末をもって完了されると契約には規定されています——の作中時期も刊行時期より早く設定されています。『ハテラス』の物語は一八六〇年四月から翌年一月にかけて起こったとされているからです(ヨーロッパへの帰還はそれよりも後)。然るに、『覚書』によれば、物語の真の始まりだという地下への降下は、七月に始まるばかりか、『地球の中心』の本来の作中時期はまさにこの一八六一年だったことが作中の四つの日付から判断できるので。一八六一年七月は、ヴェルヌ

『二十世紀のバリ』は、テクノロジーとアメリカ化によってフランスの魂が破壊される反ユートピアを描き、主人公である詩人は、傷心を抱えて餓死します。これまでヴェルヌ批評が看過してきた事実がひとつあって、それは、エッツェルによって手厳しく批判された後、おそらく小説を再提示するためでしょう、ヴェルヌ本人が草稿の余白に書き込みを行っていることです。

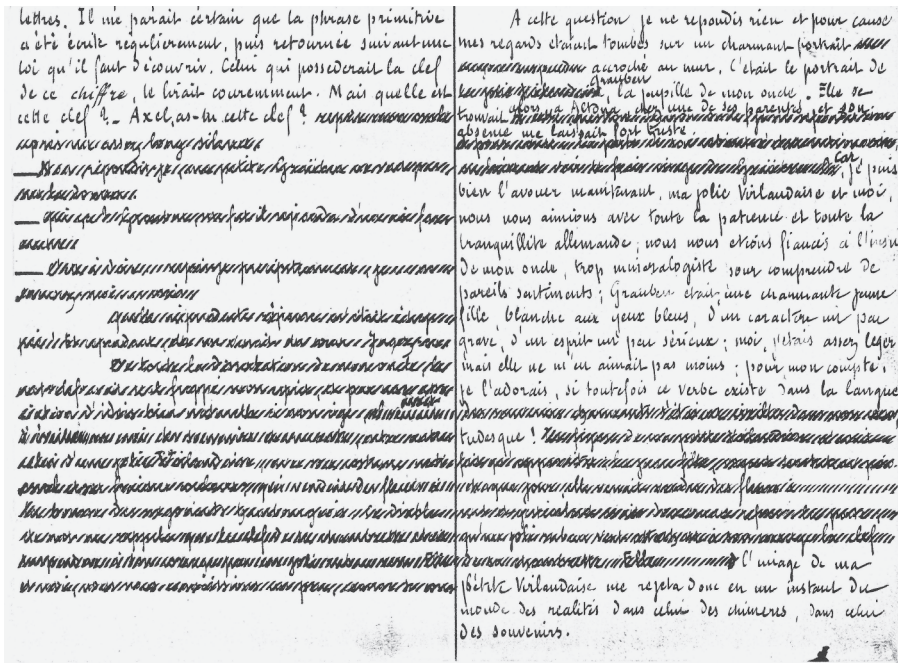
実際、薄れている鉛筆書きで、こう書かれています。「たぶんもっと活用すべき」(XV se)。問題になっているのは、一年に一度、一分間だけ「主人公の伯父の」居間を照らす太陽の光——おそらく作者本人の住まいをメランコリックに描写している——です。まったく発展させられていないので、あってもなくてもいいような描写です。事実として、このコメントが書かれた数週間後、あるいは数ヶ月後に、『地球の中心』の中で太陽光線が再度現われ、高度に視覚的な形で活用され、地球の中心への道を指し示すこととなります。

『地球の中心への旅』の草稿——このタイトルの初出——に関する限り、作者が一人で書いたと考えていいでしょう。エッツェルの介入は、アクセルがグラウベンを夢想する場面〔XI〕(XV IS)、文体に関わる幾つかの指摘が僅かに認められるばかりです。

明らかに清書原稿であるにもかかわらず、この資料は、書き直しが加えられる以前の状態において、刊行ヴァージョンとは明白に異なっています。章の数が少ない。移動している箇所が多々ある。科学的情報源が明示されている。リーデンブロック教授の人



【図1】エッツェルの殴り書き(『地球の中心への旅』IV 15)



【図2】「彼女の胴着にぶら下がって」(『地球の中心への旅』III 11)

物像はもっと暴力的だったらしい。彼の住む境界は「恐ろしく」、女中と同様し、蠅を押し潰し、アクセルを殴り、ケーニッヒシュトラーセの住民を監禁したのもわざとでした。

草稿がもたらす発見は、アクセルとフィラント娘グラウベンの関係についてです。彼らは、グラウベンの寝室で差し向かいの午後を何度も過ごしていたとおぼしく、彼らのしていたことは、青年と「二十歳の娘」の典型的な行動であると強調された上で、抹消された数行によって描かれ、そこにはアクセルの夢想が明らかにされています。

魅力的な思ひ出……僕の心の中……毎朝、彼女は花を持ってやってきました……綺麗な緑色のリボンが彼女の寝室の鍵を胴着に結びつけていたという考え「花を売っていった彼女……いちご……彼女の寝室の鍵は緑の「薔薇色」のリボンで彼女の胴着にぶら下がっていることを僕に思ひ出させに「やって来た」。彼女と僕、僕たちはお互いをよく知っていた。なぜなら……彼女の薔薇」(III 11-12)

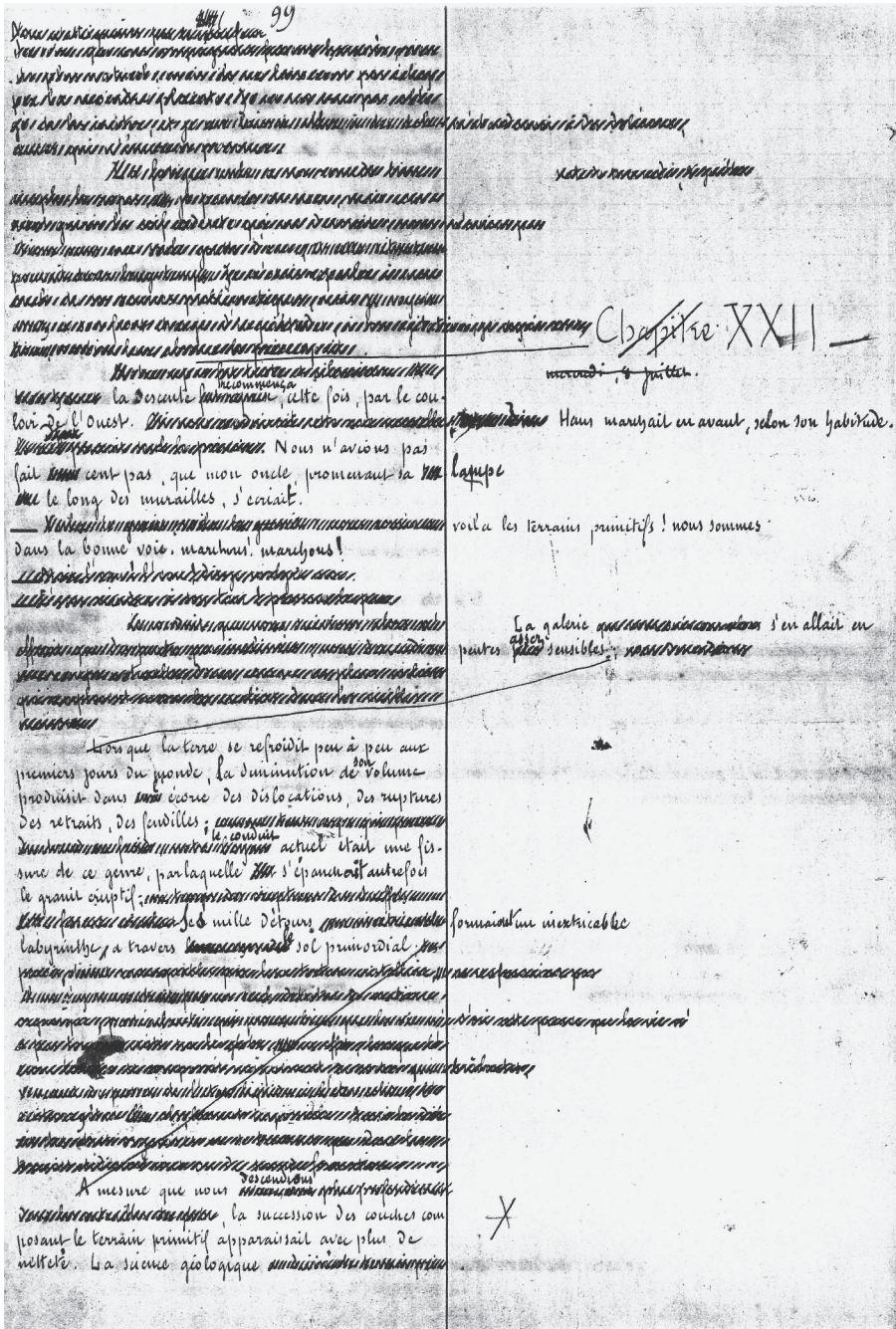
「僕たちはお互いをよく知っていた」。この一文の含意によって、家の鍵に関するオブセッションが説明されます。刊行ヴァージョンでは、フロイト的象徴主義を探すのでもない限り、このオブセッションはなんの意味もなしていません。胴着に秘められた鍵は、神聖不可侵の彼女の寝室だけではなく、その心、そして肉体への

道を開くのです。果物と花の売り子という彼女の職業自体、意味深長であって、なぜなら、「フィラント娘(Virhandl's)」という言葉の生みの親は、ハンブルクの若い売り子の娘たちを魅力的に描いていて、同じ緑色のリボンを付けた彼女たちの「身持ちがいかに固いとはいえ、彼女たちが最後には誘惑に屈しないのは稀である」ことを——本気で、でしょうか？——残念がっているのです！

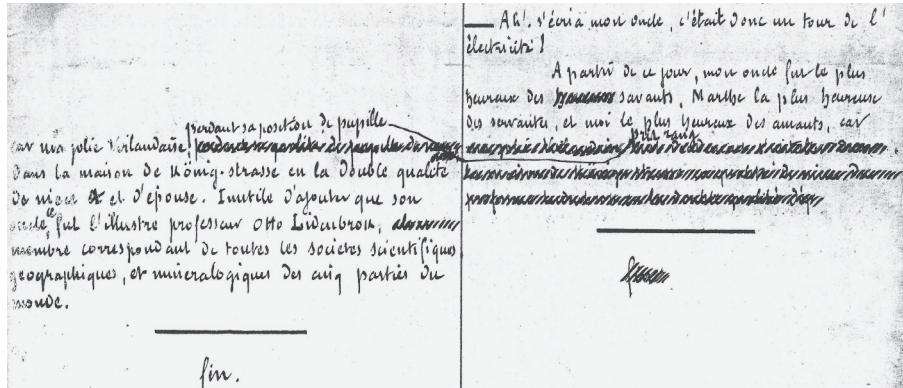
同様に、この青春時代の恋のクレッシェンドの果てに訪れる小説の結末において、若者は、マルタのことを「最も幸せな女中」、ようやくフィラント娘と結ばれた自らを「最も幸せな恋人」(III 193)と呼んでいます。この享楽がエッツェルに削除されるのは避けがたいことでした。

草稿の独自性は、以上の戯れに尽きるものではなく、というのも、地下の冒険もかなり違っていたからです。例えば、草稿の九頁は四分の三以上が抹消されていますが、地下の地質学に関する箇所には相当します(図4)。また、主人公たちが喉の渇きに苦しむ、アクセルが気を失い、教授とハンスの心に疑いが忍び込む暗いシーンもその半分が消されています(図5・6)(XXII 101-102)。逆に、岩壁の向こうに水流を発見しようとする肯定的な半頁は、一〇二頁の最後の余白に加筆されています。

同様に、洞窟も草稿の執筆後に変形されています。この初期の段階では精彩に富む細部が目立ち、例えば、大洪水以前の生き物たちの旺盛な繁殖を強調するきわどい指摘が二つあります。相変わらず刊行ヴァージョンより感じが悪く、非科学的な態度を示す



【図4】地質学的記述の削除（『地球の中心への旅』XXI-XXII 99）



【図3】「最も幸せな恋人」（『地球の中心への旅』XLIII 193）

リーデンブロックは、過去における大規模な崩落の可能性や、洞窟と地上の間の直接的な繋がりについて思弁をめぐらせませす。グラウベン港の命名は、エッツェルの教育的性格を典型的に示すトポスと言えますが、この段階では存在しません【図7】（XXXII 140）。

だが、最も驚くべきは、刊行ヴァージョンにない箇所です。最も古い段階の『地球の中心へ』は、本当らしさを演出し、現実の旅行記をそっくり模倣する意志において、『ハテラス』や『気球』に奇妙なほど似通っています。地下における動植物の生態が現行ヴァージョンの規模に達し始めるのは、草稿の直しにおいてなのです。最初に書かれたヴァージョンに、キノコの森や巨大な植物、先史時代の骨、生きている怪物たちの存在をめぐる想像をいくら探しても無駄です【図8・9・10】。イクトオサウルスとプレシオサウルスの戦いすら、そこでは迫力を欠いているのです【図11・12】。

草稿の余白で始まった拡張作業は、その後も続けられます。海の怪物の戦い——一八六四年の単行本初版の該当箇所は、草稿ヴァージョンに僅かな加筆を施したものとなっています——の後、リーデンブロックがさらに地下深く下りていこうとするのはどの版も同じです。単行本初版においては、探検家たちはその後でサクヌッセンムの短剣と岩に彫り込まれたイニシャルを発見し、地球の中心への道を示されることになっていました。

『地球の中心への旅』はいかなる新聞や雑誌にも連載されていません。この小説は、単行本刊行後に作品構造に変更が加えられた唯一の事例に当たっています。事実、一八六七年五月に刊行され

lorsque je les souris, j'aperçus mes deux compagnons immobiles et roulés dans leur couverture. Dorénavant ils ne bougèrent plus. Pour mon confort, je ne pouvais trouver un

les dernières paroles de mon oncle retentissaient dans mon oreille. Tout était fini, car

je regardai plus attentivement l'islandais

dans les profondeurs de la grotte.

102.

instant de sommeil, je souffrais trop, et surtout de la poitrine que mon mal était probablement sans remède. Dans l'état où nous étions, il ne fallait pas songer à regagner la surface du globe.

Il y avait une liasse de livres d'école éternelle. Il me semblait parfois que toute cette masse pesait de tout son poids sur mes épaules. Je me sentais courbé et je faisais de violents efforts pour me retourner sur mon lit de granit.

quelques heures se passèrent ainsi, je me sentais dans une situation désespérée. Un silence profond se faisait autour de nous, un silence de tombeau, rien n'arrivait à travers les murailles de granit.

Cependant, au milieu de mon sommeil, je me sentais un certain bruit. Je regardai plus attentivement l'islandais dans les profondeurs de la grotte.

que signifiait ce départ? Hans nous abandonnait-il? Mon oncle dormait, mais nous voulions vivre. Mais vous ne pûtes trouver passage entre mes livres desséchés.

101

du globe.

Nous étions mués dans l'immense prison de granit.

A huit heures du soir, le silence se fit.

Mou oncle marchait en avant. Il ne voulait pas s'arrêter. Il tendait l'oreille pour surprendre les murmures de quelque source. Mais rien! un silence effrayant regna autour de nous.

Cependant, mes jambes refusèrent de me porter. Je restais à mes postures pour ne pas obliger mon oncle à donner l'air de la grotte. C'est-à-dire pour lui le coup fatal redouté. Car la journée finissait, la dernière qui lui appartenait, et l'eau manquait toujours.

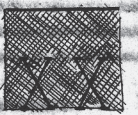
Heureux, mes forces m'abandonnerent, et je m'écroulai sur mes bras. Je sentais les membres de mon oncle se débattre et tomber de ses livres.

— a moi! je murs

Mou oncle revint sur ses pas. Il me couronna de ses bras, puis les parda soudainement de ses livres.

— Tout est fini!

Le plus effrayant geste de colère frappa ma dernière fois mes regards, et je fermai les yeux.



Martean

【図6】暗いシーンの削除(続き)、『地球の中心への旅』XXII 102)

【図5】暗いシーンの削除、『地球の中心への旅』XXII 101)

た挿絵入り八折大判において、地下に降下しようとする前に、三七章から三九章までの部分の大半が新たに挿入されました。この部分はおそらく一八六六年の変わり目に書かれたと思われるが、当初のものと野心的な計画の名残なのかもしれません。というのも、『ハテラス』の八折判初版の序文において、エッツェルがこう書いているからです。「われわれは……著者によって新しく書かれた数章を増補した改訂版『地球の中心への旅』を刊行する予定です」。

一八六七年のヴァージョンは、存在の巨大な連鎖を繰り広げ、まずヨーロッパ人の祖先の骸骨(リーデンブロック)がそれについて長々と講釈する)、そして一二ピエ以上の身の丈がある巨人の牧夫が番をしているマストドンの群という劇的な発見を付け加えます。この大胆なエピソード、純然たる空想の産物は、当時の科学的・宗教的信条を覆し、ヴェルヌが通常守っている真実らしさの枠を逸脱しています。同時に、ムーランニキニャールの名高い「先史時代の」頸骨に関する、どちらかと言えば偏った紹介が加筆されています。

かくして、一八六七年の変更は、一八六四年版のそれを直接引き継いでおり、後者もまた、清書原稿の余白に認められる変更を拡大したものでした。これらのエピソードは、ヴェルヌ自身による小説の要約にも含まれておらず、彼によれば、地下に下りることそのもののほうがエピソードよりも重要だったのです。小説の唯一の目的は「様々な波瀾を交えて、地球の地質学的層を描写すること」(「覚書」)だと言うのですから。

ましよう。『神秘の島』の元になったロビンソンのもので。

余白に対する書き込みの中には、小説本文と明らかに無関係のものが幾つか認められます。事実、二人の少年を紹介する記述の横に、まずたった一言、「マットレス」(図13)と書き込まれているのです。

それから、船乗りのフリップが貴重なマッチ箱をいくら探しても見つけれないシーンに向かい合うように、劇的な書き込みがあつて、今度という今度は、小説と何の関係もないように見えます。「その通りだ／動揺へ可哀想に思うだろう！手紙がすべてを語っている／なんだと！ 病気。／手紙を読み返す／マットレス」(図14)。

草稿の表紙にある「七〇年」(二月三日) (図15)から判断して、この下書き原稿の最初の部分は一八七〇年一月下旬に書かれたのでしょう。余白の書き込みは、本文が書かれた後で書かれていることが多いので、この年の春と推定できるでしょう。

二番目の書き込みに照らして考えると、最初の書き込みも個人的な性格のものと思われる。問題になっている手紙は、内密の内容であると同時に——「動揺……可哀想……病気」——誤解の余地のない文面——そのうちの一通は「すべてを語っている」——だったのでしょうか。最新の手紙によって、それ以前に伝えられていた情報が正しかったこと——「その通りだ」——が示されたのです。最後の書き込みは同じ頁の上部にあつて、大文字ひとつからなっているように見えます——たぶん「M」です(図14)。

一八六〇年代のほかの小説にも編集者は大幅に介入し、変更を唆し、提案し、命令し、たとえ真実らしさや論理を犠牲にしても、有無を言わず——罵声の力も借りて——何章も削除させ、彼の見方と文章をヴェルヌの仕事に押しつけました。一八六六年の編集者序を見る限り、『地球の中心』に新しく二章を付け足すという発想も少なくとも部分的には編集者に帰せられるでしょう。いずれにせよ、編集者が草稿を読んだ後で、大がかりな加筆が施されているのは明白です。したがって、彼がそれらをヴェルヌに最低でも耳打ちしたのだと考えられます。

『ハテラス』に加えられた検閲を残念に思わなければならないのと同程度に、後世の読者にとって『地球の中心』の最も興味深いと思われる箇所を編集者が加筆させたのではないかという疑いは、彼に有利な材料として用いられるべきでしょう。ヴェルヌが年長の編集者に終生感じていた恩義は、『地球の中心』にその原因を求められるのかもしれませんが。ほかの小説における編集者の介入は、明らかにこれほどうまく行っていないのですから、それを補うだけのなにかがあつたのだと考えなければ、これほど永続した感謝の念を説明するのは困難です。

「M」

さて、ヴェルヌの草稿の探索を続けつつも、ここで話の方向を変え、ヴェルヌの実人生における私的なドラマの痕跡を探してみたいと思います。まず『ロビンソン小父さん』の下書きに飛び込み

草稿以外の場所であれば、「M」は一八七〇年初頭現在で八歳だった息子のミシェルを指しているとも考えられます。『ロビンソン小父さん』における二人の少年の紹介は、兄の「痲癩」と共に、弟の「落ち着かない、びくびくしている、こらえ性のない」(「」)性格を強調しています。同様に、ミシェルに関するヴェルヌの一番古い記述は、彼がおまるを壊したので修繕しなければならぬことを知らせるものでした。息子の健康のことが問題になっているのであれば、ヴェルヌはそれが不安定であることは知っていたに違いないのですが、手紙はオノリーヌから送られたものだったのかもしれない。その場合、マットレスとはミシエルのそのことでしょう。

他方で、「M」——「愛する(amor)」と同音——は女性のイニシャルかもしれません。なぜなら、「動揺」、そしてたぶん「病気」は、この当時、男性よりか弱いと見做されていた女性を連想させる言葉だったからです。ヴェルヌ自身が示している動揺に鑑みて、恋愛関係が問題になっているという印象を受けます。編集者エッツェルとの往復書簡はこの推測を補強します。事実、一八七〇年の前半の手紙には、パリにいた愛人の存在が何度も仄めかされているのです。一八七〇年五月、小説家は妻の非難を尻目に自家用ヨット(サンシエル号)で上京しています。そして、なんらかの差し障りがあつて、カルチエ・ラタンに係留されていたヨットに合流せざるをえない羽目に陥り、ヨットはなお一〇日間そこに係留されたままになります(「七〇年五月三日」の書簡)。小説家



【図16】マリア・マルコヴィッチ

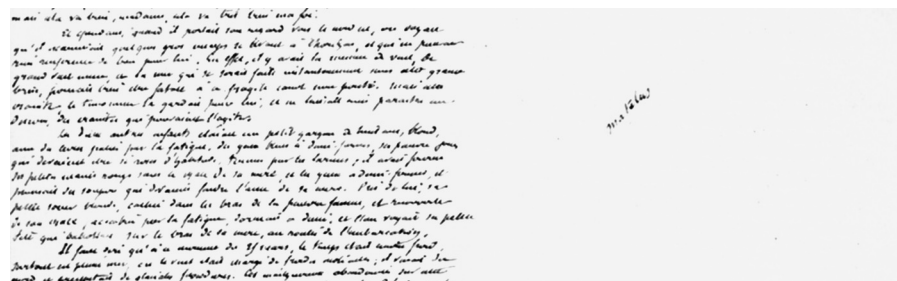
『ロビンソン小父さん』の下書きに対する最初の言及が「恋に我を忘れ」た様を綴る手紙に現われているのはこの点で意味深く思われます。同じ書簡はさらにこう付け加えています。「パリではごた

「ロビンソンもの以外の」ほかのことは一切考えられませんが、パリは別にして、ですが。そこに私は恋に我を忘れて到着し、同じ状態で帰って行くのです！ ああ、自然よ！

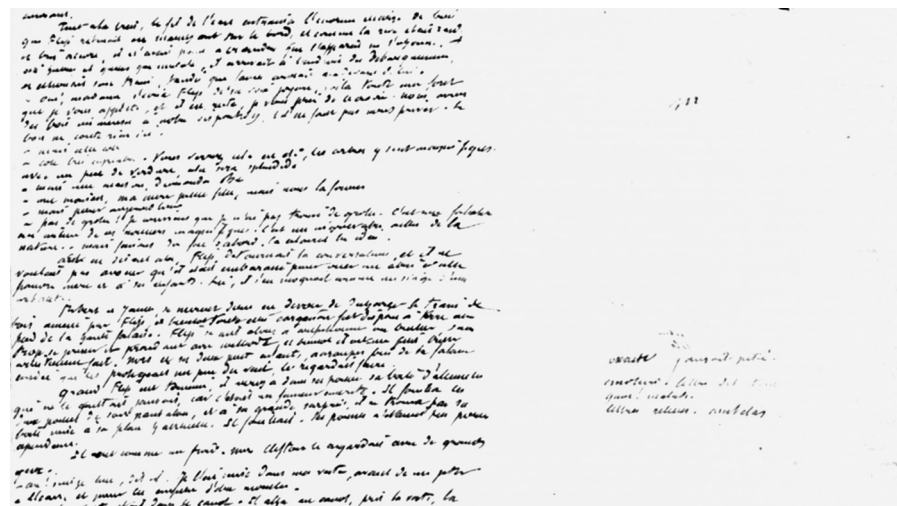
この手紙にお返事下さる際、月末に私がパリにいる必要があるのだということをお返事下さる際、月末に私がパリにいる必要事実ですし。

はパリ滞在を入念に計画し、最大限に享受しました。

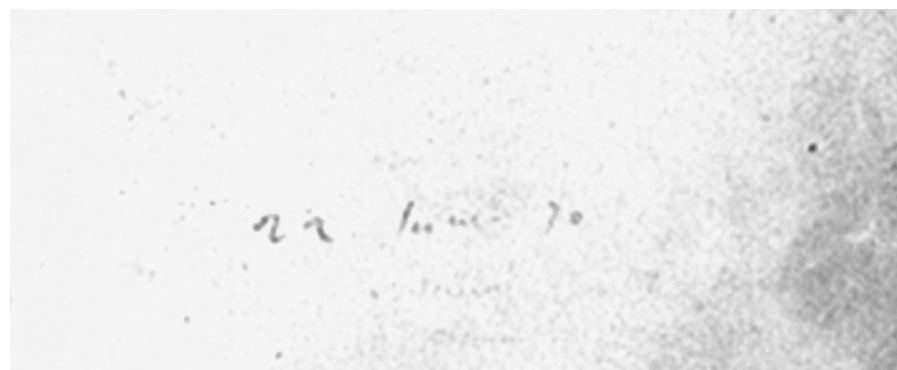
あなたが起きていますが、これまでのところ深刻ではありません。このごたごたは、「病氣」の最初の知らせに対応しているのかもしれませんが。そして、その知らせが事実だと確認された後で、パリに行く必要が生じたのです。通常、病気の知らせが事実か否かを確認する必要はありません。少なくとも「その通りだ」という言い方はしないでしょ。この形容詞が女性形になっているのは、病気の性質を密かに反映しているのではないのでしょうか。「M」の正体をめぐって、ヴェルヌ専門家の狭い世界で論争が起きるかもしれません。私は仮説を二つだけ提起しておきたいと思っています。ヴェルヌの婚外関係は、単なる「M**」ないし素っ気ない「ヴィッツ夫人」という筆名で執筆を行っていた作家としばしば結び付けて語られます。ここでの仮説としては生憎なことに、そこで報告されている出来事は、一八六一年以前に起きたとされているのです。したがって、「M」がマリアないしマリ、(アレクサンドロヴァナ・)マルコヴィッチ、ヴェリンスカヤ伯爵夫人、筆名マルコ・ヴォフゾク(一八三四-一九〇七年)【図16】のことである可能性はゼロではありません。彼女は、ロシア語、ウクライナ語、フランス語で著述を行ったウクライナの作家であり、翻訳家であり、一八七〇年代にはヴェルヌの複数の小説についてエージェンツトの役も務めています。マリアとヴェルヌは愛人関係にあったのではないかという説は、証拠こそないものの、すでに提起されています。どうやらイワン・



【図13】「マットレス」(『ロビンソン小父さん』I 2)



【図14】「その通りだ/動揺(可哀想に思うだろう!)」手紙がすべてを語っている/なんだと! 病氣。/手紙を読み返す/「マットレス」(IV 9)



【図15】「七〇年一月二日」(『ロビンソン小父さん』第一ヴァージョン[0])

ツルゲーネフ(一八一八—一八八三年)の愛人だったらしいこの女性は、たぶんエッツェルの愛人でもありません。信頼できる情報源によれば、彼女は、一八七〇年の四月第二週から同年五月三日ないし一四日にかけてパリに滞在していました。おまけに、彼女は一八六〇年から一八六七年二月までパリ近郊、一八六五年以降はヌイイに住んでいたようです。ヴェルヌは一八六三年から一八六六年にかけて同じ郊外に住んでいました。一八七〇年という特定の年に関して言えば、ヴェルヌとマリアのバリ滞在は少なくとも部分的に重なっています。関連する最後の要素は、二人の人物が同じルーヴル・ホテルに宿泊する習慣を有していたことであるように思われます。このホテルはリヴォリ通り一六六一一六八番地にありました。^{19, 21}

要するに、三つの書き込みは、一八七〇年における作家の私生活という問題に新たな要素をもたらすものです。ヴェルヌの気がかりがミシエルの振る舞いと無関係だったことを証明するのは難しいでしょう。ですが、美しきマリアに対する言及である可能性を排除することも容易ではありません。

▼1 草稿の参照箇所に関しては、「III」のように章および頁を示す。草稿の一章から三七章までは、八折判の章立てと一致しており、「III」と言えは両者に当てはまる。しかし、草稿の三八章から四三章までは「MS XXXVII」のように表記し、刊行ヴァージョンで新たに二章増えているため、両者は一致しない。草稿からの引用中、ゴチック体は一八七七年刊行の八折判にない箇所を示し、傍点はこの版にない箇所を示す。それ以外の箇所は草稿と刊行ヴァージョンが一致している。

- ▼12 ナント市立図書館「B 48」として所蔵されている。『ロマンソン小父さん』の下書きの写真を再録することを許可していただいた同図書館およびマルセッター夫人に感謝申し上げます。
- ▼13 『海陸三万里第二部』下書きとも同じ書き込みが複数認められる。「M」(X 39)、「Z」(XI 43)「これは確かだ」の真下書きがみられるが、同じ頁で謎の「[XXXIa]」という書名がみられる。ネコブ「[M] ma jument [次ページ] / ma mais [たぶ] s[か]」(XII 47)。「ma」はイタリア語で「か」の意味だが、同時に「マ」(manan)のことだろうか。
- ▼14 フェルディナン・ド・ウイヌヌ宛「一八六八年」(二月一日付および六八年二月一日付書簡)。
- ▼15 「七〇年五月四日」および「七〇年二月一七?日」の書簡。オノリーヌはあまりにも惨めな気持ちだったので、エッツェルに密かに手紙を書き、ヴェルヌの迷走について情報を求め、以下のようにつづめてくれている。「こんなことを書いていめんなら、わたしを哀れと思っ、わたしの手からすり抜けようとする夫を掴まえておく手助けをしてくださませ」(「七〇年八月一五?日」)以下の引用に拠る。Charles-Noël Martin, *La lit et l'œuvre de Jules Verne*, Michel de l'Ormeval, 1978, p. 182)
- ▼16 *M^{mes}. Un Roman à Montreux* [Geneve], [H. Georg], [c. 1876], p. 182)の作品は「ウイニッシュ夫人」

そのため、ヴェルヌ自身による強調は省略されている。

- ▼2 *Bulletin de la société Jules Verne* (BSJV), n° 135, p. 42-50.
- ▼3 この小説の草稿の表紙には、エッツェルの筆跡で「全紙一〇枚分の一巻になると書き込まれている」(訳注・フォルカー・デースによれば、この注記を書いたのはエッツェルではなく、仲介者のアルフレッド・ド・ブレアである。また、『イギリスとスコットランドへの旅』がエッツェルに提示され、拒否されたこと)したがってゲラにならなかつたことは、同時代のウジエヌ・ミューレルの証言(本号読書会を参照)から明らかである。
- ▼4 「七月一日(日曜日)」「七月六日」の前日に当たる「金曜日」(XXXV)、「八月七日」から長い四日間が経った「日曜日」(XXXVI)、「八月一日(木曜日)」(XXXVII 139)、この四つの組み合わせが可能なのは一八六一年だけである。
- ▼5 「一八六三年」というこの不吉な年「(XXXVII 177)」と草稿にあり、ある手紙の日付が「一八六三年一月九日」(XXX 197)となっている。
- ▼6 『教育と娯楽誌』で「プラント船長の子供たち」の連載をすぐにも始めなければならなくなつて、作者はこう書いている。「まったく、『ハテラス』は二月まで続くばかり思っていたからです」(エッツェル宛一八六五年一月二八日付書簡。北極小説の連載は実際には一八六五年二月五日に終了している。二、三ヶ月分の連載がなくなつたことになる。一万五〇〇〇から二万語に相当する分量である)訳注・ヴェルヌの書簡は、作家と編集者が単に連載期間の見積もりを誤っていたと解釈するほうが自然である。
- ▼7 『パリ』余白への書き込みが「地球の中心」の問題のシーン執筆の前だとすれば、後者は早くて一八六三年秋ということになる。
- ▼8 Armand de Flaix, *De Dornumak* (1862), p. 30-31.
- ▼9 «Avertissement de l'éditeur», 26 novembre 1866, p. 2. さらに編集者はこう続けている。「……『ハテラス』」この版を、われわれは常に最新の状態にする所存です。この言葉は、ヴェルヌ小説を繰り返し改訂する意志を示しているように思われる」(訳注・この解釈は非常に疑わしい。単にエッツェルは「この版」に「驚異の旅」挿絵版にヴェルヌの新作が収録されるたびに読者に知らせると言っているだけである)。
- ▼10 地理学協会の例会での発言(一八六五年三月十七日)において、小説家は「彼の著作において想像力が果している役割について……陳謝した。彼の念頭にあったのは、『地球の中心』の大胆なシーンだったのだろうか。
- ▼11 この段落は、近刊予定の拙著の結論の一部を要約している。Verne in F.O.: *La Manuscript*
- ▼17 以下を参照: Ion Hobanu, cité par Martin, « Recherches sur les maîtresses de Jules Verne », *BSJV*, n° 56, p. 292-295; Herbert R. Lotman, *Jules Verne: An Exploratory Biography*, New York, St. Martin's Press, 1996, p. 146; William Butcher, *Jules Verne: The Dynastic Biography* (YDRB), Thunder's Mouth, 2006, p. 212.
- ▼18 Cécile Compté, « A propos du séjour de Jules Verne en Suisse », *BSJV*, n° 65-66, p. 56-61; Jean-Paul Gourévitch, *Hazel, Corry, Le Serpent à plumes*, 2005, p. 231; source citée par Compté.
- ▼19 以下の引用に拠る。Compté; Martin, « Recherches »; cf. *JDR*, p. 301.
- ▼20 ヴェルヌは五月二日なら「三日」にパリに居た(Margot, p. 91)。
- ▼21 Compté, en parlant à la fois de 1870 et plus généralement: Jules Hoche, « Jules Verne » (1883), in Jean-Michel Margot, éd., *Jules Verne ou par ses contemporains fantaisistes*, Amiens, Encrage, 2004, p. 159-163. (訳注: だが、ルーヴル・ホテルは現在存在せず、直ぐ近く別の敷地に移転しています)